

幼少期に泉鏡花が通った学校の名称

－「愛真学校」か「真愛学校」か－

The Original Name of the School that Izumi Kyoka Attended in His Childhood

－ Which Is the Original Name of This School, “Ai-shin” or “Shin-ai”?－

朝倉秀之

要旨

泉鏡花が幼少時代（1883～1885）に通った学校の名称は、北陸学院と関係があり歴史の中では男子校として開校されたことが記録されている。泉鏡花の幼少の頃に通った学校は「愛真学校」である、と北陸学院歴史編纂担当者たちも日本基督教団金沢教会の歴史編纂担当者たちも考えてきた。現在もそのように考えている。泉鏡花記念館が「真愛学校」と表記しているは理由があるのであろうが、「真愛学校」の名称が一人歩きして泉鏡花研究者の中で定着してしまうことへの懸念があり、ここに歴史的な事実を示しておくことが必要であると考え、ここに記録するのが要旨である。

キーワード：「愛真学校」(Ai-shin Gakko)／「真愛学校」(Shin-ai Gakko)／蔵書印(ownership Seal)

はじめに

「愛真学校か、真愛学校か」という問いは、ある文をきっかけにして起こった。その論文を書いた方が一冊の書物の中に「真愛学校」という表記を見つけたことにある。その論文の著者は小林輝治氏であり、その論文は¹⁾1970（昭和45）年に書かれた。証拠となる書物が編集・発行されたのは1930（昭和5）年である。その論文と書物との間には40年の隔たりがあるが、その間にこの問いが取り上げられたことはなかった。しかし、小林輝治氏は『石川近代文学館ニュース』第三号に載せた論文の中で、次のように述べている。

ここで、真愛学校につき少しばかり触れておこう。それは、真愛学校は愛真学校ではないか、そういう問いが必ず聞かれるからである。

あたかもその問いが長年に亘り問題となってい

て、必ず聞かれるかのように表現しており、「真愛学校」が正しい表記だとしている。しかし、実際にはこの表記が公に論じられたことはない。あえて言えば、この論文が発表されたことで、そのような問い「真愛学校は愛真学校ではないか」と問う人もいて、聞かれるようになったのである。小林輝治氏が「真愛学校」が正しいとする根拠は二つある。一つは金沢市内にある金沢教会の歴史書の中に「真愛学校」という表記を発見したことである。もう一つはその金沢教会の書庫にあった十数冊の本の中に「真愛」という名称のついた蔵書印を発見したことである。

第1章 中澤正七編集『五十年史』²⁾

「真愛学校」という表記は金澤日本基督教会（現在の日本基督教団金沢教会）の『五十年史』の中にある。その編集者は中澤正七である。この本が発行されたのは1930（昭和5）年9月であった。この本の中に「真愛学校」という表記があったことが小林輝治氏の論文の根拠となった。小林輝治氏はこの『五十年史』の中で3回「真愛学校」と

ASAKURA, Hideyuki

北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科
英語Ⅰ・Ⅱ

記載されていることを指摘している。実際にはこの「研究ノート」の執筆者である筆者が調べてみると5回記載されているのが分かった。最初の記載は目次の中に「眞愛學校」の表記を見ることが出来る。目次の「金澤初代の教役者」の項に「眞愛學校」の表記がある。金沢教会史の中で初めて「眞愛學校」という表記が出現した箇所である。この「眞愛學校」という表記は北陸学院の歴史にとっても初めてのこととなる。編集者中澤正七は現在の北陸学院中学高等学校の前身である北陸女学校第十代校長であり、北陸学院の歴史の中で重要な人物であり³⁾、金澤日本基督教会（現在の日本基督教団金沢教会）の長老でもあった。

ウキン氏も同様に任期満ちたので、その後の去就を決せねばならなくなった。當時は内地座居の許されない時代であったから、外國人として金澤に居住することは出来ない掟となつてゐた。然るに氏の志は教育よりも傳道であつた。折角これまで守立てたる金澤教會を去ることは到底出来ない事でありまた何時までも金澤に居住して市民のために盡したい希望もあつたので、長尾八之門、杉本貫聖、西村大元、狩屋直重、長尾卷、井口徳三諸氏と相計り私立学校を設立する事とし、十五年(1882年)四月大手町にある八之門氏の持家を借受けて、教室兼會堂に充て、それを眞愛學校と稱して氏はその教師として引續き金澤に居住する事となつた。金澤教會は實は此處から生まれて來たのである。翌十六年二月、内外人の寄附金三百十圓を以て殿町五十六番地に地面家屋を購入し、假會堂並に眞愛學校の教室に充てた。その當時の生徒は僅に十七八名に過ぎなかつたが、その中には前文中相橋徳五郎氏も居られたさうである。⁴⁾

(下線は執筆者)

因に眞愛學校は二十一年小立野に校舎を新築して北陸英和學校と改稱し、經營に苦心したに拘らず、三十二年遂に廢校の已むなきに至つた。⁵⁾

(下線は執筆者)

確かに「眞愛學校」と表記されている。下線を引いた3カ所である。小林輝治氏は本文に3カ所あることを指摘していて、本文ではこれがすべてである。実際には「眞愛學校」の記載は、すでに述べた通り本文に3カ所、欄外に1カ所、目次に1カ所を含め合計5カ所ある。小林輝治氏にとって、信頼すべき書物の中にあつた「眞愛學校」の表記は大きな発見だったのであろう。しかし、この本だけにしか見つけることが出来なかつた。この3カ所だけで「眞愛學校」が正しいとするには十分でないことも、小林輝治氏はよく承知していたと思う。そこで、金沢教会の許可を得て、書庫を調べたり、北陸学院短期大学ヘッセル記念図書館（当時）で『北陸五十年史』、『北陸学院八十年史』を調べたりしている。

たしかに、従來の記録は、わたしの見た一つを除いて、すべては「愛真學校」であつた。先に金沢市が編んだ「市史年表・明治編」(昭和四〇・五)でも、「大手町二番地のキリスト教会に私立愛真學校が開かれた」そうはつきりとある。眞愛學校といへば、最も親しい北陸学院(當時は「金沢女学校」)でも、その『北陸五十年史』(昭和一一・一〇)・『北陸学院八十年史』(昭和四一・三)共に、愛真學校とある。

ここで小林輝治氏は金沢教会の『五十年史』以外に「眞愛學校」という表記を見つけたことは出来なかつたと述べている。それはそのはずで現在に至るまでこの本にしか載っていないからである。ここで記憶に留めておくべきは編集者の名前である。上に引用した文章に引き続き、小林輝治氏は

次のように付け加えている。

『トマス・ウキン伝』でも同じだ。

こんな短い言葉で片付けているが、とんでもないことである。この『トマス・ウキン伝』こそが金沢教会の『五十年史』を編集した同一人物中澤正七にとって如何に重要な本であるかを知れば、こんな短い言葉では片付けられないはずである。小林輝治氏は確かに『トマス・ウキン伝』を読んだのであろうが、疑問を持たなかったのであろうか。なんの理由も説明もなく「愛眞学校」と訂正されているのを、小林輝治氏は確かめて、少しがっかりしただけである。そしてこともあろうに「愛眞学校」は誤植とまで言っているのである。しかし、この『トマス・ウキン伝』には明確な訂正の説明がしてあるのを小林輝治氏はどのように読み解いたのであろうか。このことを見てみよう。

第2章 中澤正七編『トマス・ウキン伝』

中澤正七が『トマス・ウキン伝』を編集したのは1932（昭和7）年10月である。金沢教会史である『五十年史』を編集した中澤正七はすぐにこの『トマス・ウキン伝』の執筆に取りかかったことになる。『五十年史』を書いてからまだ2年しか経っていない。実際には、1年後に書き始めているのである。金沢教会の『五十年史』を編集したとき、金沢教会を設立し、愛眞学校も同時に設立したトマス・ウインのことはいつか書かなければならない人物だと考えていたことは、想像に難くない。急いだ理由は訂正することだけだったのだろうか。しかし、その理由は別の所にあった。『五十年史』が1930（昭和5）年9月に出版されたことはすでに述べたが、その後5ヵ月もしないうちに大変なことが起こったのである。トマス・ウインが1931（昭和6）年2月8日の日曜日、キリスト教の聖なる日の説教を依頼されて金沢教会の会堂の最前列に着席していた。突然、その礼拝中に倒れて天に召されてしまったのである。中澤正七はその日のことを次のように描写している。

斯くて二月八日は吹雪の寒い朝であった。博士は金澤日本基督教會の禮拜説教者として起つべく、會堂の最前列のベンチに着席してゐた。博士は會衆と共に讚美歌を唱ひ、司會者秋保牧師の聖書朗讀に、又開會の祈りに耳を傾けてゐたが、その祈りの終らんとした時、突如博士の邊りから大きな息のやうな聲がした。會衆は驚いて、頭を上げて見た。博士の體は静かにベンチの左の肘掛けに傾いてゐた。博士夫人始め數名いて人々が駈寄つて、先ずベンチの敷蒲團を集めて假りの寢床となし、その上に博士を横へ、會衆中にあつた長老中島醫師先づ診察し、次で長老淡中院長も駈付けて介抱した。⁶⁾

トマス・ウインが天に召されたことは金沢教会にとって大事件であった。礼拝に出席していた長老職にある医者が注射などの手当をしている中で會衆の祈りが起こり、礼拝は祈りの会となった。会堂内は驚愕と悲痛とに包まれたが、そこには一種の靈氣が漂うように感じられたという。脈拍は全く途絶えて、心臓の音も聞こえなくなる。トマス・ウインは静かに横たわり、眠るようであった。大きな息のような声は最後の息であったのだ。このトマス・ウインの突然の死で、中澤正七は『トマス・ウキン伝』に取りかかることを決心する。その本の中で沢山の人たちから聞いた生前の博士の思い出が語られることになる。『五十年史』を出版するとすぐに訂正を迫られていた「眞愛学校」の記述を『トマス・ウキン伝』の中で述べることになる。「例言」の項の中に、そのことを伝えている。その言葉を詳細に見てみよう。

例言

一、本書の資料は、トマス・ウキン博士手記の「自傳」（子女に興へたる金澤傳道當時の經歷）、同「エス・アール・ブラウン博士傳」、同「歐亞漫遊日誌」、同「滿州訪問記」、及び博士が

二三の教友に語られたる懐奮談、柴田博陽氏著「ウキン夫人傳」、「金澤日本基督教會五十年史」、山本秀煌氏著「日本基督教會史」、牧園（金澤日本基督教會発行、朝の光（殿町の日本基督教會発行）、その他、多数諸氏から寄せられたる博士の逸事談等である。

一、ウキンはウインと記すべきであるかは、疑問とする所であるが、^{ママ}裂きに、大連日本基督教會婦人會から出版せられたる、「ウキン夫人傳」と相並びて、世に行はれしめんために、ウキンと記すことゝした。

一、博士の出生地、金澤入りなどにつき、『金澤日本基督教會五十年史』には、多少事實相違の點があるにつき、之を訂正することゝした。

一、本書の編纂に當り、有益なる資料、或は便宜を興へられた左記諸氏の厚意は、深く感謝するところである。

ジョージ・ウキン氏、フローレンス夫人、黒木五郎氏、石川純一氏、堀清氏、佐藤良雄氏及び本書中に記名されある諸氏。

(下線は執筆者)

昭和七年八月十日

編者⁷⁾

ここでの「多少」の言葉から一つ一つは挙げないまでも、『金澤日本基督教會五十年史』には事実と異なっている事柄があるので「訂正する」ということが控えめではあるが、表現されている。金沢教会の歴史を知っている方々から「愛眞學校」のことだけでなく、訂正すべき箇所をジョージ・ウイン、フローレンス夫人、黒木五郎、石川純一、堀清、佐藤良雄などの諸氏から指摘されたのであろう。また『ウキン夫人傳』も読み直している。だからこそ、訂正を兼ねて、できるだけ早く執筆する必要があったと考えられる。

やがて免状下り、學校設立の認可も興へられ、十五年四月、大手町にある八之門の持家を借受けて、教室兼會堂に充て、それを私立愛眞學校と稱して開

校した。金澤教會は實は此處から生れてく來たのである。翌十六年二月、内外人の寄附金によつて、殿町五十六番地に地面と家屋を購入し、教室並に假會堂とした。當時の生徒は僅かに十七名に過ぎなかつたが、その微々たる生徒の中から前文中橋徳五郎を首め、有為な政治家、海軍將校、新聞記者等が現れたから不思議である。⁸⁾

(下線は執筆者)

二年前の「眞愛學校」を「愛眞學校」と確かに訂正している。その他にも、「長尾八之門、杉本貫聖、西村大元、狩屋直重、長尾卷、井口徳三諸氏と相計り私立學校を設立する事とし」や「寄附金三百十圓」を削除している。名前も、金額も様々な説があつたので省いたのであろうか。一年前には入れていなかった「有為な政治家、海軍將校、新聞記者等が現れたから不思議である」と加筆もしている。この箇所などは『ウキン夫人傳』⁹⁾の中の文章が取り入れられている。このように訂正箇所は、控えめに「訂正」としているが、「多少」どころか、かなり訂正・加筆をしているのである。

^{ママ}裂きにも記した如く、ウキン創立の私立愛眞學校は、英語私塾の如きものであつたが、經營をポートルに委ねて、廣坂通に移轉して、學則を改正し、普通通學課を授けるやうになると共に、學生も漸次増加して、明治二十一年小立野飛梅町に宏莊なる校舎を新築するにいたつたが、その翌年、ポートルは大阪に轉任したので、ウキンが再び直接經營の衝に當り、子弟を薰育することゝなつた。¹⁰⁾

(下線は執筆者)

この研究ノートは、他の訂正・加筆の部分が重要なのではなく、「愛眞學校」か、「眞愛學校」か、を中心としているので他の訂正・加筆にはこれ以

上触れない。ここに挙げてある文章も、何の注もなく『五十年史』の「眞愛學校」に触れずに、「裂きに記した如く、ウケン創立の私立愛眞學校は」と訂正している。

予は、博士に深き縁故を有する金澤日本基督教會に關係し、また博士最後の寓所なる北陸女學校に關係せるところから、己が不敏不文をも顧みず、之を引受け、直に資料の蒐集に着手し昭和六年八月一日より、それを整理し、執筆に従事して、九月末日、一先づこの稿を終わり、爾後新なる資料の興へらるるに随つて、之を補足し、訂正し、兎にも角にも本書を成すに至ったのであるが、記事の體裁その他の點において、博士の傳記として物足らぬところが多いことであらう。¹¹⁾

「例言」の中にあるように、有益なる資料、或は便宜を興へられた前出諸氏、すなわち、ジョージ・ウイン氏、フローレンス夫人、黒木五郎氏、石川純一氏、堀清氏、佐藤良雄氏及び本書中に記名されある諸氏からの貴重な助言がなされたことが記載されている。出来るだけ早く出版をし、訂正の箇所も補いたいと考えていたのであろう。歴史編纂に関わった者なら歴史的な事実が違った場合、出来るだけ早く訂正したい気持ちがあることは当然のことである。この重要な本について小林輝治氏は全く触れていない。単に『トマス・ウケン傳』も同じく「愛眞學校」と表記しているのを確認した、と述べているだけである。この訂正こそが重要な事柄だったのではないだろうか。なぜそれを問わなかったのか。小林輝治氏は「眞愛學校」の名称を見つけた時点で、方向を見誤ったと思われる。金沢教会歴史編纂者たちや北陸学院の歴史編纂者たちは、当然「愛眞學校」が正しい表記であるとして、あえて中澤正七の誤記「眞愛學校」を取り上げて来なかったし、小林輝治氏の論文の中に出てくる「眞愛學校」を問題視して来なかったのである。

第3章 『五十年史』以前

それでは『五十年史』以前の書物では、どのような表記をしているのかを見てみよう。『五十年史』以前に重要な歴史の本は、二冊ある。一冊目は『金澤教會略』である。阪野嘉一編纂・発行で1891(明治24)年4月13日発行となっている。『五十年史』が発行される39年も前のことである。この本の最後には明治二十四年四月十三日印刷、明治二十四年四月十三日出版と同じ日に印刷と出版が行われたことが分かる。そして住所は明治22年から二年後で金澤市となっている。金澤市油車二十四番地、編集者とあり、後で正誤表により兼発行者と付け足すようにと表記されている。一頁には牧師坂野嘉一編纂とあるが、二十一頁の最後では平民阪野嘉一となっていて「坂」が「阪」となっているが、正誤表はついていない。

十五年五月八日林清吉氏帰京し八月二十日太田留助加藤敏行の両氏傳道者として來着せらる四月ウイン杉本貫聖西村大元狩谷眞重長尾卷井口徳之長尾丸景門等諸氏の計劃にて私立英語學校を設立し愛眞學校と稱し大手町に開校す十六年二月内外人の寄附金貳百拾圓を以て殿町に家屋地面を購求し假會堂並に愛眞學校の教場に充つ六月五日太田留介氏、¹²⁾
(下線は執筆者)

二カ所に「愛眞學校」の名称を認めることが出来る。ここからは明治十五年から十六年にかけて「愛眞學校」が設立されたことが記載されているが、大手町に開校したあと十六年二月に殿町に移転したことになる。

因みに記す愛眞學校は明治十六年六月七日官の認可を得て大手町貳番地に假校舍を設け全年十一月八日殿町五十六番地に移轉しまた十七年九月四日南長九十四番地に移轉し更に十八年一月十

六日廣坂通り十三番地新築校舎へ移轉し北陸英和學校と改稱し二十一年小立野に移轉す¹³⁾
(下線は執筆者)

ここで同じ本の中で「愛眞學校」がはっきりと明治十六年六月七日官の許可を得て大手町二番地で開校されたと記載されている。さらに明治十六年には高田稔という人物が私立「愛眞學校」を開校したことが、『金澤市教育史稿』に取り上げられている。トマス・ウインの設立した「愛眞學校」と高田稔なる人物の開校した「愛眞學校」との関係は不明である。

二冊目は『最初二十年間の金澤教會』である。毛利官治が1901(明治34)年5月に発行している。この本は『金澤教會略』が書かれた1891(明治24)年から10年が経過している。この本は金沢では県立図書館に所蔵されている。金沢教会にも、現在の北陸学院大学ヘッセル記念図書館にも、玉川図書館にも所蔵されていない本である。この本は貴重な書物なので写真版にて金沢教会が保存する予定である。

金城の大手町に通ずる所を歩兵第七聯隊の正門となす城門の東西路に傍て壕を湛ふ其東壕の極まる所樹林鬱葱として自然に外郭をなす一小矮屋の其下に屏むあり二十年以前金澤教會建設の式を行ひ北陸最初の基督教會が始め呱呱の聲を揚げしは實に此家にてありき當時長尾八之門氏此に住み充てて以て講義所となしたりき而して會衆漸増加するに及んで更に家を殿町に貸して假會堂となす
ウイン、ツルーの兩氏専門學校との契約年限滿つるに及んで單に宣教師の名を以て外人寄寓の許可を此地に得るは當時法制の未だ許されざる所なり金澤傳道の運命は將に兩氏の去就によりて定まらんとす是に於て類に金澤在住の道を求めしと雖も如何せん専門學校は

己に外國教師を支ふるの資に乏しく其解任も亦止むを得ざるに出て到底全校へ留任の望あらず故に他に一つの學校を設立し兩氏をして之が教師たらしむるに如くはなしと時にツルー氏長町四番地に一家を貸し兒童を集めて英語教授をなせる折なりければ之を以て一箇の私立學校となすの計画忽ち熟し杉本貫聖、西村大元、長尾卷の諸氏創立の任に当たり遂に許可を得て校を起し私立愛眞學校と稱す後ち小立野に轉して英和學校北陸學校と改稱せしもの即ち是な金澤教會己に幾多の會員を有うし學校の組織己に成りて校舎の必要を感じ故に教會學校相合して一の建物を設けんことを圖り十六年二月内外人の寄附金貳百拾圓を以て殿町に家屋と地所とを購ひて之に充つ教會の勢力漸盛なるに隨ひ十七年會堂新築の計画起り來り¹⁴⁾

(下線は執筆者)

この本は十頁に一箇所「愛眞學校」の名称を読み取ることが出来る。また年代は明治十六年二月に殿町に移轉したと読むことが出来る。

金澤教會創設の始めより或は直接に或は間接に傳道にも治會にも全幅の心力を傾け而して今尚産の助勞をなすものをウイン氏及全婦人となす全氏夫妻十二年十月二日を以て息女メリー嬢と共に來澤せられ職を専門學校に奉じて類に傳道に力を盡し全校を辞するに及び又愛眞學校を起こして基督主義の教育に従事す教會の青年其門下に出づるもの少からず十九年五月病を得療養の爲故山に歸る事二年、二十一年健康を回復して又來る三十二年六月休養の爲再び歸米し一年を越えて來澤せらるやミッション會議は氏を大阪に轉任せしむる、¹⁵⁾

(下線は執筆者)

また、十四頁に「愛真學校」をウインが興こしたことを知ることができるが、明治何年かは明確ではない。明治十二年以降であることはこの文章から読み取ることができる。何年かはともかく、金沢教会の『五十年史』以前で「眞愛學校」の表記を見ることはない。

第4章 小林輝治氏論文以外に見る「眞愛学校か、愛真学校か」の論文

今井一良氏の『北陸英学史研究・第2輯』(1988年刊)の中の「北陸英和学校創立時の校名と元文相中橋徳五郎と同校との関係について」の項で「Ⅱ. 北陸英和学校をめぐって」の(1)創立当初の校名は、「眞愛学校」か「愛真学校か」?を引用してみよう。ここで明確に、「眞愛学校」か、「愛真学校」かという直接の問い方の文章を見ることができる。

「眞愛」と「愛真」とその何れが眞実であったのか。このことに疑問をもった人物の存在は私以外にも既にあった。その人は泉鏡花研究者の小林輝治氏(北陸大学助教授)であった。そして氏は「愛真学校」ではなく「眞愛学校」であると主張し、その論拠を氏が北陸学院高校在職中の昭和45年3月発行の「石川近代文学館ニュース」第3号に発表し、また昭和47年2月発行の「国語研究」Ⅳ(石川県高等学校国語研究会刊)にも書いておられたのであった。“ミス・ポートルとその周辺——「鏡花年誌」考証の一部——”が前者の、“泉鏡花とキリスト教——「鏡花」誌注・その1——”が後者の論文名である。

そして小林輝治氏の論文の引用が続いて、今井氏は小林氏の引用の後で、次のように述べている。

さて、「眞愛」とは「眞実の愛に生きる」というキリスト教の根本義を表わす。

「眞愛堂」・「眞愛学校」ともにそうしたキリスト教的イメージへの肉迫を感じさせる。しかし「愛真」となると、それは「眞実を愛する」ということで単に哲学的な命題を見るにすぎない。したがって「愛真」はその語呂のよさから巷間に謝り伝えられたものであろうか。

眞愛が眞実の愛に生きるというキリスト教の根本義を表し、愛真はたんなる語呂がよいということも強引な論法である。そして今井氏は、もう少し踏み込んで、

金沢教会の蔵書の印章を証拠として「眞愛」だという、この主張に私は同意したいと思う。教会ではなく、学校関係の文書類に「眞愛学校」と書かれたものが発見された訳ではないのが、少し気になる点ではあるが。

(下線は執筆者)

以上見てきたように小林輝治氏の論文が大きく影響していることは文面からも伺うことが出来る。この印章の証拠として「眞愛」だという、主張に同意したいと思った今井氏は、実際の印章を確認していないのである。

次に丹羽俊二氏を取り上げよう。『石川郷土史会々誌9号』1976(昭和51)年12月の中にある「金沢におけるトマス・ウインの足跡」である。

(明治)十四年ウインの任期は一ケ年であった。その後外国人教師を採用しないのであったから、取り敢えず私学校設置を出願して教育滞在として更に引続き旅行免状を受けることにした。十五年四月大手町二番地長

尾の持家を借受けて仮教室として二つの事業を始めた。これが金沢教会発祥の地でもあると共に私立愛真学校と名づけて開校した。

(下線は執筆者)

ここに「私立愛真学校」という名称が使用されている。その後の記載に次のような文章がある。

愛真学校の校名に「真愛学校」という別説があるが現在金沢教会の蔵書のうちに「愛真学校」の校印を押した本があるというから立証されると思う。

これは初めて文章として小林輝治氏の「真愛学校」という「別説があるが」と述べて「愛真学校」論を進めている。この文章の根拠になったのは、『北陸学院八十年史』であると思われるが、この論拠は明確ではない。金沢教会の蔵書に「愛真学校」の校印が押された本があると記載されているが、実際にはそのような本は存在しないからである。ただ「金澤女学校」と印が押された本は存在する。丹羽氏も確かめたわけではなく、あるというから立証されると思うと述べているだけである。この論文を執筆した丹羽俊二氏は金沢教会初代の長老長尾八之門の長女「丹羽しか」の孫にあたる方である。ここで丹羽氏は「真愛学校」説には疑問を持っていたことだけは確かである。

今井氏にもう一度登場してもらおう。『北陸英学史研究第8輯』「北陸英和学校と金沢英学院——金沢にあった2つのミッション系男子学校の歴史」である。

ここは学校名を「一致教会派に属する北陸英和学校」としているが、前記のように北陸英和学校と改称したのは、明治18年からであるから、鏡花が入学したのは、殿町にあってまだ真愛学校と称していた時代のことであった。

(下線は執筆者)

すでに真愛学校ありきで論を進めている。同じ頁に次のような文章がある。

彼女 (Francina Porter) は真愛学校で教える一方、鏡花の家の近くに布教のため講義所を持ち、日曜学校を開いていた。

(下線は執筆者)

この二カ所で使用されているのが「真愛学校」の名称であり、今井氏ははっきりと小林輝治氏の「真愛学校」説に頼っている。

小林輝治氏の論文が発端となり文学関係や英語教育関係の方々が「真愛学校」か「愛真学校」か、を論ずるようになっていったのである。すでに述べた『トマス・ウケン傳』以降の日本基督教団金沢教会の出版物にしても、北陸学院関係の出版物にしても、「真愛学校」の表記はなく、すべて「愛真学校」の表記である。

第5章 蔵書印

小林輝治氏が根拠にしたもう一つが、金沢教会の書庫にあったとされる蔵書印である。確かに、『五十年史』に表現された3つの「真愛学校」だけでは十分ではないことは、小林輝治氏も承知していた。そこで金沢教会の書庫を調べているとき、本に押された蔵書印を発見するのである。

迷ったわたしは、もっとほかに手がかりでもと、金沢教会の古い蔵書を手にした。すると、思いもかけないものを見つけたのである。それは、その中の十冊ほどの見返しに押された蔵書印である。角型で、どれにも「石川県金沢区石浦町真愛堂」と刻まれていた。「金沢区」は、明治十一年から二十二年へかけ、使われていたものだ。それから

は「金沢市」ということになる。

(下線は執筆者)

蔵書印は印そのものではなく、本に押された蔵書印である。十冊ほどの見返しに押されていた。確かに、現在も存在する本に押されている蔵書印¹⁶⁾である。ここで一冊の本を通して、蔵書印とは何かを知るために明治二十二年の出版状況を見てみよう。その本の題は『靈魂不滅論』であり、著者は大橋小太郎とある。1889(明治22)年2月12日発行、丁度金沢区が金沢市に変わる年である。この本を取り上げる理由は、明治二十年代の本の出版の様子を知ること、小林輝治氏が発見したとする蔵書印がどのような位置にあるのかを知ることが出来るからである。明治二十二年二月十一日印刷、同年二月十二日出版、そのあとに著者並びに発行者、印刷者が続いている。

この本の著者の項目には、石川縣士族大橋小太郎と続き、住所が記載されている。金澤區蛤坂町九十五番地、発行者の項には、石川縣士族水登勇太郎、住所全區石浦町七十五番地、そして印刷者として石川縣平民吉本次郎兵衛、住所全區石浦町二十三番地ノ二となっている。ここでこの研究ノートにとって重要なのは、発行者水登勇太郎という名前である。この人物は金沢教会の会員で、執事職、後には長老職にも就き、当時の金沢教会の日曜学校の校長も務め、ある時期には牛乳搾取場を経営し、一時繁盛したこともあり、後に金沢女学校にも関わっている人物である。重要なヒントとなるのは、その名前と住所の間に記載されている文字である。そこには「眞愛堂事」と確認できる。事とは「通称・雅号などと本名との間に用いて両名称の指す人物が同一であることを表す」とあって、ここでは水登勇太郎を表すことになる。

角印で「石川縣金澤區石浦町眞愛堂」と押されている本は水登勇太郎の所有物であることの証となる。教科書として使用されていたか、それとも副読本として貸し出されていたかははっきりしないが、すべての本に「三週間以内ニ必ス返納スヘシ」¹⁷⁾という紙が貼ってある。

眞愛堂は本の貸出元であり、住所も教会の住所ではない。縦に石川縣金澤區石浦町眞愛堂¹⁸⁾とあ

る。

買別所として、神戸元町通三丁目 福音舎、大坂京町堀四丁目 福音舎、西京寺町夷川下ル 福音堂、東京銀座三丁目 十字屋、同観田須田町二十五 原胤昭¹⁹⁾などと印刷されており、金沢では眞愛堂が取り扱っていたのであろう。この蔵書印を小林輝治氏は発見したのである。この名称をすぐに「眞愛学校」と結びつけてしまった。しかし、この蔵書印が教会堂を表すこともないし、教会そのものを表すこともない。小林輝治氏は次のように書いている。

金沢教会の石浦町移転は明治十七年十一月のことである。眞愛堂とは、勿論教会そのものを指していたのであろう。そして恐らくは、大手町に教会が設けられた当初から、そう呼ばれていたものである。先の『五十年史』をくりかえし引くと、「大手町にある八之門氏の持家を借受けて、教室兼会堂に充て、それを眞愛学校と称し」、つまり設立当初から、教室は「眞愛学校」と呼ばれ、会堂は「愛真堂」としたしまれていた、そう見るのが真相なのではあるまいか。だから教会を離れると、「北陸英和学校」(4)と、名前も新しく変える必要があったのである。だから恐らくは『トマス・ウケン伝』・『北陸五十年史』あたりの、誤植か記憶違いが、そのまま広がってしまったのであろう。

(下線は執筆者)

「眞愛堂とは、勿論教会そのものを指していたのであろう」というのも強引な結論である。会堂が教会の中の礼拝をする場所を表すことはあるが、〇〇堂が教会そのものを表すことはない。だから、そう呼ばれることもいない。その結論の導き方が強引すぎる。小林輝治氏が「だから恐らくは『トマス・ウケン伝』・『北陸五十年史』あたりの、誤植か記憶違いが、そのまま広がってしまったのであろう」とは、全く根拠のない記述ということに

なる。『五十年史』を編集しているとき、中澤正一が「眞愛学校」と記述してしまったことは事実であるが、『トマス・ウキン傳』では明確に訂正しているのである。

第6章 結論

小林輝治氏が論拠としている二つの事柄があった。一つは『五十年史』の中にあった「眞愛学校」という表記である。もう一つは金沢教会の書庫にあった蔵書印である。『五十年史』は同じ編集者中澤正七の『トマス・ウキン傳』の中ですべて「愛眞学校」と訂正されている。蔵書印についても本の販売元の印章であることも古い書物の中で見てきた。小林輝治氏の根拠は二つ共に失われると思われる。『五十年史』の「眞愛学校」の方が誤記ということになり、蔵書印は、学校も表さなければ、教会堂も表さないという結論となる。中澤正七が『五十年史』の中で「眞愛学校」と記載したことは事実である。しかし、どうしても訂正しなかった一つであり、多くの諸氏から指摘を受け、次の本の中で正式な名称にしたのが事実である。

「泉鏡花記念館」は1999（平成11）年11月14日に鏡花の生家跡に建てられ、開館されたところから小林輝治氏の論文の影響を受けて、眞愛学校が記載されているのではないかと考えられる。当時、それが事実と判断され、表記されたのであろう。もし事実が違っていれば訂正の必要があるのではないか、というのが本研究ノートの結論である。

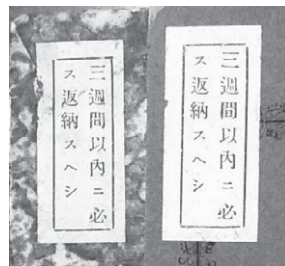
今回の研究ノートを調べるにあたり北陸学院史料編纂室の梅染信夫学芸員に有益な助言をいただいたことを付記する。

〈注〉

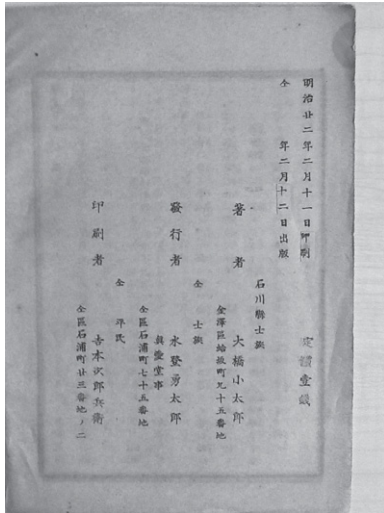
- 1) 小林輝治『泉鏡花とキリスト教——「鏡花」私注・その1——』日本文学研究資料叢書：泉鏡花 p.238~248
- 2) 金澤日本基督教会発行、中澤正七編集『五十年史』
- 3) 楠本史郎著『中澤正七伝』2015
- 4) 金澤日本基督教会発行、中澤正七編集『五十年史』 p.14~15
- 5) 金澤日本基督教会発行、中澤正七編集『五十年史』 p.16
- 6) 中澤正七編（1932）『トマス・ウキン傳』 p.214
- 7) 中澤正七編（1932）『トマス・ウキン傳』の例言の項 p.1
- 8) 中澤正七編（1932）『トマス・ウキン傳』 p.48
- 9) 柴田博陽著『ウキン夫人傳』 p.18
- 10) 中澤正七編（1932）『トマス・ウキン傳』 p.79~80
- 11) 中澤正七編（1932）『トマス・ウキン傳』の序の項 p.2
- 12) 阪野嘉一編（1891）『金澤教會略』 p.3
- 13) 阪野嘉一編（1891）『金澤教會略』 p.19
- 14) 毛利官治著（1901）『最初二十年間の金澤教會』 p.9
- 15) 毛利官治著（1901）『最初二十年間の金澤教會』 p.14
- 16) 蔵書印の例



- 17) 三週間以内ニ返納スヘシの例

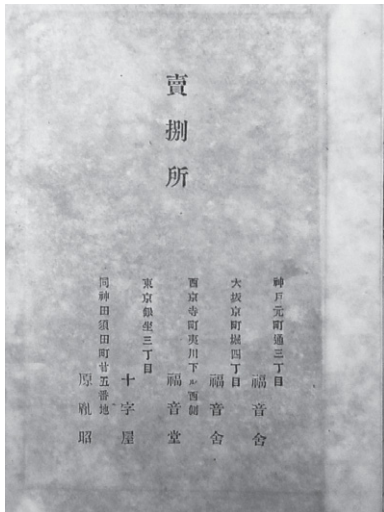


18) 真愛堂と印刷されている裏表紙



10. 中澤正七編『トマス・ウキン傳』1932 金澤日本基督教會發行
11. 池上鋼他郎編『北陸五十年史』1936 北陸女学校
12. 『北陸学院八十年史』1936 北陸学院
13. 金井信一郎發行『明治学院百年史』1977 明治学院
14. 日本文学研究資料叢書『泉 鏡花』1980 有精堂
15. 『金澤教會百年史』1981 日本基督教団金沢教会
16. 『金澤教會百十年史』1997 日本基督教団金沢教会
17. 楠本史郎著『中澤正七伝』2015 日本キリスト教団 出版局

19) 販売元を表す写真



〈参考文献〉

1. 米國派遣傳教使事務局『世界周遊記』1882 福音舎
2. 上野己熊記述『堤多書註釈』1883 銀座十字屋
3. 米國聖教書類會社『エルザベツ小伝』1883 日本横濱印行
4. 植村正久著『福音道志流部』1888 米國聖教書類會社印行
5. 大橋小太郎著『靈魂不滅論』1889 真愛堂事
6. 阪野嘉一編纂『金澤教會略史』1891 吉本次郎兵衛印刷人
7. 毛利官治著『最初二十年間の金澤教會』1901 金澤日本基督教會發行
8. 柴田博陽著『ウキン夫人傳』1914 大連日本基督教婦人會發行
9. 中澤正七編『五十年史』1930 金澤日本基督教會發行

